

# 中谷宇吉郎 雪の科学館 通信

NAKAYA UKICHIRO  
MUSEUM OF  
SNOW AND ICE

第 17 号

2010(平成22). 3.31

発行/中谷宇吉郎 雪の科学館  
〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地  
TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088  
URL▶http://www.kagashi-ss.co.jp/yuki-mus/  
E-mail▶yuki-mus@angel.ocn.ne.jp

## 指定管理元年

これまで加賀市の直営であった(財団の時期も含む)中谷宇吉郎雪の科学館の管理運営が、22年度から指定管理に移行します。委託先は加賀市総合サービス株式会社(略称KSS、皆本真司社長)とNPO法人I Love 加賀 ネット(川口泰之理事長)の共同体で、委託期間は5年です。

総合サービスは市が出資してできた会社で、市内の文化・体育施設の管理運営など多岐にわたるサービス業務を行っています。I Love 加賀 ネットは、加賀市、特に片山津地区の振興をめざし、2008年にNPO法人として認証されました。

平成6年11月の開館から15年5ヶ月たつ当館にとっての大きな変化です。館の設置目的や基本目標をもとに、柔軟で、意欲的に、新たな展開を試みたいと考えています。

## 平成22年度の事業計画

指定管理のもとで行う事業には市からの指定事業と自主事業があります。検討中のものもあり、確定次第ホームページなどで紹介します。

### 植物から・水と氷の贈り物ーなおいかずこ・齋藤義範 写真展 (4.29~8.31)

植物や雪とのふしぎな出会いを撮ったなおいさんの写真と、氷花に魅せられた齋藤さんの写真のコラボ展です。29日には談話会も開催します。(→16頁)

### 子ども雪博士教室

(前期分。後期分はホームページなどで紹介)

- 4.24(土) 空気砲(福島郁子学芸員、湖北小学校で)
- 6.26(土) バランスと運動(河田脩二氏)
- 7.24(土) 水ロケットを作ろう(円居繁治氏)
- 8.1(日) 子ども雪博士まつり
- 9.25(土) ストローで笛を作ろう(福島郁子)

### 企画展「ふるさと発、中谷博士のもとへー小松中学校から北大へ進んだ人たち」(仮題)(10.21~2011.3.1)

小松中学校から宇吉郎のいる北大物理へ進んだ人たちの活躍や宇吉郎との交流を紹介します。

### 第6回雪のデザイン賞の募集

12月頃開始し、2011年春頃まで募集する予定です。

### 雪のデザイン賞寄贈作品展(仮題)(12.16~2011.1.11)

これまで5回の入賞作品で館に寄贈された50点余りを加賀アートギャラリーで一堂に展示します。

### 雪の結晶観察と旭山動物園の旅(仮題)(12.25~28)

宇吉郎ゆかりの大雪山旭岳温泉での結晶観察を主としたツアーを予定。

## 純氷まつりに1万3千人、今年は6月6日に開催

初夏の上野公園で恒例の「TOKYO 純氷まつり」に、当館は「氷の科学館」のテント設置と実験紹介に協力しました。5月24日、小雨の中、1万3千人で賑わいました。今年は6月6日に開催されます。(→13頁)



## 写真乾板レプリカの展示

宇吉郎らが撮った天然雪や人工雪の写真乾板(原版は館が収蔵)のレプリカ116点をライトボックスで観察するコーナーができました。(中谷英二子さんから寄贈)



## 再来年2012年は宇吉郎の没後50年

写真は宇吉郎が亡くなった1962年4月11日の3年後、

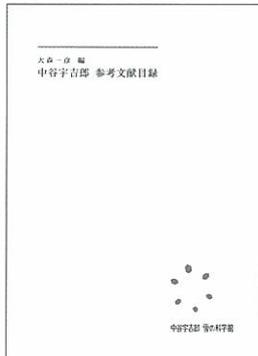


三回忌に中島町に建てられたお墓の除幕に立ち会った人たち(お墓の右2人目は静子夫人)。2年後の2012年は没後50年の節目を迎えます。

## 宇吉郎参考文献目録の補遺版を発行

中谷宇吉郎に関する参考文献の目録は、大森一彦氏の編集により、2000年に雪の科学館から発行され、宇吉郎研究の貴重な手掛かりになってきました。それから10年たち、新たに発見・発行された文献385点(540細目)を大森氏がまとめた目録が補遺版として発行されます。

補遺版は、加賀市総合サービスから4月に発行され、200円で頒布の予定です(左の写真は本編で、500円)。



## 大森氏に図書館サポートフォーラム賞

大森一彦氏が図書館サポートフォーラム賞を受賞しました。大森氏による寺田寅彦や宇吉郎を主とした科学者や文人の書誌研究が評価されたもので、2009年4月14日、東京・日本教育会館で表彰式が行われました。

## 中谷宇吉郎科学奨励賞 倉元氏と錦城小グループに

中谷博士の業績を記念して若い人たちの科学への取り組みを励ますこの賞の21年度の実賞者は、雪氷学の若手研究者の部は国立極地研究所の倉元隆之氏、小学生の部は錦城小学校ふるさと塾の児童6名で、中学生の部の該当者はありませんでした。

倉元氏は、中部山岳地域の源流域において、冬季の水循環と化学物質の挙動について雪氷化学的な視点から研究し、融雪初期に化学物質が集中的に溶け出す「アシッド・ショック」現象との関連を軸に、冬型と南岸低気圧型の降雪中の化学成分の違いなどの詳しい分析を行ったことが評価されました。

錦城小学校ふるさと塾グループは、「部分日食2009～つゆ空のもとで見られた日食現象～」が県



受賞した倉元氏



受賞した錦城小グループ

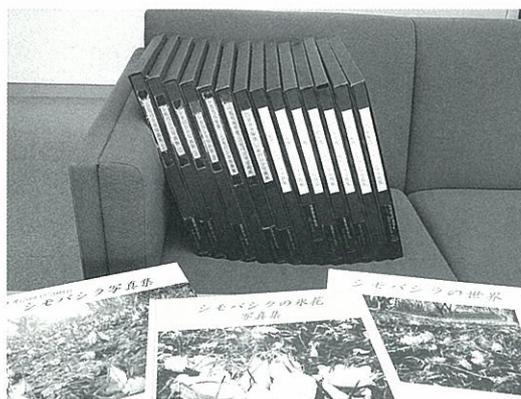
の小中学校科学作品展で優秀賞を受賞し、市内児童による最も優れた研究作品と評価されました。

表彰式は2010年2月15日、館の映像ホールで行われ、式の後、倉元氏が「中部山岳地域の源流域における水循環と物質循環」の題で記念講演しました。

## 齋藤義範氏から最後の氷花アルバム

植物シモバシラにできる氷花の撮影を長く続け、毎年1冊雪の科学館に写真アルバムの寄贈を続けてきた齋藤義範氏(八王子市在住)から、最後のアルバム(17冊目!)が届きました。齋藤氏は健康上の理由から氷花の撮影活動を終わりにするとのことでした。

当館に寄せられた17冊のアルバムは、自然の造形美を多くの人に知ってもらったり、研究資料として大切に活用したいと考えています。



最後の写真集「シモバシラの氷花」など全17冊

## なおいさんと齋藤さんのコラボ写真展 —4月29日には談話会を開催—

指定管理元年の最初の企画展として、植物や雪とのふしぎな出会いを撮ったなおいかずこさん(札幌市在

住)と、氷花に魅せられた齋藤義範さんの写真のコラボ展を開催します。この写真展では、美しい写真を鑑賞していただくとともに、二人の写真を対比させることから、科学的な関心を喚起することを試みます。

写真展初日の4月29日、なおいさんと、樋口敬二氏による写真展をめぐる談話会が開催されます。是非ご参加下さい。(詳しくは16頁をご覧ください。)

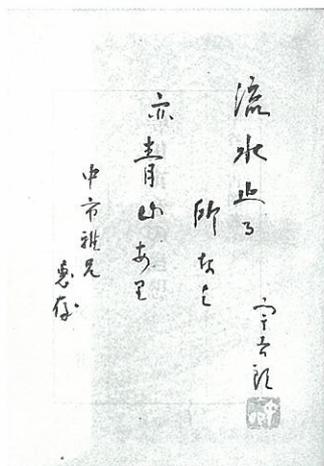
## 宇吉郎・寅彦・漱石 関連書籍105点寄贈

東京都中野区在住の山内松子さんから宇吉郎著35点、寺田寅彦著20点、小宮豊隆著9点と夏目漱石・寅彦・宇吉郎等に関する書籍41点、計105点が館に寄贈されました。松子さんの夫、故・山内玄三郎氏の大量の蔵書から館の希望を考慮して選ばれたもので、ダンボール4箱分です。

玄三郎氏は、会社経営の傍ら宇吉郎・寅彦・漱石や民俗学の本に親しみ、沖縄の人頭税の歴史を研究した『大世積綾舟(うふゆつんあやぶに)』を著しています。

松子さんによれば、玄三郎氏は宇吉郎が亡くなったとき静子夫人にお悔みの手紙を送りましたが、届いた

返事には、「天(そら)からの君が便りを手にとりてよむすべもなき春の淡雪 静子」(朝日新聞社発行随筆選集第1巻の月報にある)の短歌が書いてあったということです。



宇吉郎のサインと寄贈された本



## 目次

指定管理元年、22年度の事業計画	1
純氷まつり、乾板レプリカ、没後50年 参考文献目録、大森氏の受賞、中谷・奨励賞、 最後の氷花アルバム、写真展 書籍寄贈105点、紺野さんラトビアへ	2~3
21年度報告 絵をめぐる交流、高度1万円	4
子ども雪博士教室	5~6
第5回雪のデザイン賞	7~9
連携・交流・対外的な活動 (なかへち美術館での雪展 山本泰代)	10~13 10
追想中谷先生(大束三千代)、編集後記	14~15
写真展「植物から・水と氷の贈り物」	16

寄贈された宇吉郎著『寺田寅彦の追想』の扉には、「流水止るところなし 亦 青山あり 中市雅児 恵存 宇吉郎」と直筆のサインが書かれており、発行者 中市弘(甲文社)にあてたものだと思います。このように、本ができた時、宇吉郎が本にサインをして発行者に送った事例が他にもあるのか、知りたいところです。

館は寄贈された書籍を、今後宇吉郎・寅彦と漱石を繋ぐ企画を考える時などに役立てたいと考えています。

## 紺野さん、この夏ラトビアへ

福井市在住の歌人 紺野万里さんがこの夏ラトビアの「国際作家と翻訳家の家」に招かれ、創作活動のため1ヶ月間現地に滞在する予定です。紺野さんが歌集『星状六花』を出版する際、ラトビアのバイバリテーレさんのタペストリー(第4回雪のデザイン賞銀賞作品「コネクション」)の写真をカバーに載せたいと願い出たのが縁で始まった動きです。

『星状六花』はその後、英語とラトビア語の本にもなる予定です、出版は夏頃の見通しです。

紺野さんのラトビア訪問は、2005年の「雪と氷との対話展」以来の雪の科学館とラトビアの交流の歩みの新しい展開とも考えられ、期待されます。出発は8月15日の予定です。

## ミニ企画 宇吉郎 絵をめぐる交流

（4月16日～6月30日実施）

宇吉郎が絵を描き、友人に讃（短歌など）や箱書きをしてもらった掛軸がいくつかあります。絵をめぐる交流は、恩師・寺田寅彦や、その先生である夏目漱石の周囲の文人たちの間でもよく行われていました。初公開の宇吉郎の掛軸2点、寅彦の絵1点を、人物の交流がわかる資料とともに展示しました。（会期中の入館者数 4,247人）

津田青楓画「漱石と十弟子」

漱石（左奥）宅に集う文人たちをユーモラスに描いている。寅彦（漱石の隣）、小宮（手前左）、阿部（その隣）の姿もある。（同名の著書より）



（右）寺田寅彦画「書架と花」（箱書 津田青楓）

宇吉郎が伊東で静養していた頃、津田青楓から寅彦の淡彩の墨絵が送り届けられた。絵には「大正8年1月5日寺田寅彦」と毛筆でローマ字の署名がある。

（中）宇吉郎画、阿部次郎 讃

宇吉郎が描いたギリシャ彫刻のような女性の上半身像に、『三太郎の日記』の阿部次郎が「馬人の頬に音立つる 花嫁の肱の力の 弱からめやも」と書き添えている。札幌・東京の往復の途中、宇吉郎は仙台の小宮豊隆宅をしばしば訪ねた。阿部も、仙台の小宮ら文人の集まりで一緒に遊ぶ仲だった。（→通信10号4頁、今号14～15頁）

（左）宇吉郎画「注口土器」（箱書 小宮豊隆） 新収蔵品。注口土器の絵に「土の中にあるものには千年も一瞬にすぎない」と書かれ、箱には表に「宇吉郎注口土器画幅」、裏に「昭和十七年五月小宮豊隆識」とある。注口土器は、弟 治宇二郎の東大人類学教室での卒業論文のテーマ。（→通信16号9頁）

## 写真展 高度1万メートルから見た地球

（5月14日～9月8日実施）

### 写真展 上空1万メートルから見た地球

日本航空のパイロット小林宏之氏が高度1万メートルの上空から撮影した地球の写真の数々です。美しい地球が急速に変わりつつある現実がみごとに記録されています。（協力：日本航空、科学技術振興機構）

5月14日（木）～9月8日（火）



操縦席の小林氏

【関連企画】

6月20日（土）10時～11時半

JAL（日本航空）出前講座「そらいく」

「パイロットが見た地球の今」

講師はJALの機長です。定員50名。子ども雪博士教室を兼ねますが、大人だけの参加も歓迎します。（事前申込者入館無料）

お申し込み・お問い合わせは…

中谷宇吉郎 雪の科学館 (0761) 75-3323

美しい地球の環境が変わりつつあることをとらえたJAL小林宏機長の写真を展示しました（会期中の入館者は7,914人）。又、これに合わせて6月20日、JAL出前講座「そらいく」（松田和也機長）を、子ども雪博士教室を兼ねて開催しました。（→6,12頁）



6年目になる21年度は、他団体との共催も含めて教室を10回開きました。親子に限定せず、内容により、大人だけの参加もよとした回もあります。

年度の終わりに、6回以上参加した7名が子ども雪博士の認定を受けました。

このページでは、「まつり」の報告と、教室の写真を紹介します（各回の報告は次ページ）。

## 2009.8.2 (日) 子ども雪博士まつり (共催)

<指導>藤野丈志(株式会社興和) 他

興和の藤野さん、月岡さんを講師に、過冷却水生成装置「く〜るクールくん」の実験と工作を行ない、会場の映像ホールは参加者で一杯になった。雪の万華鏡、ビーズで雪の結晶作り、お持ち帰りの虹、氷のスタンドグラス、氷のレンズをつくろう（点火に挑戦は雨で中止）、氷つり、切っても切れない氷、人工雪装置の話、ナットで作る六花の雪、雪の折紙など。それぞれ大いに盛り上がった。（子ども205名 大人303名）



5.30 一円玉を浮かそう



7.18 柴山瀧の生きものとビオトープ



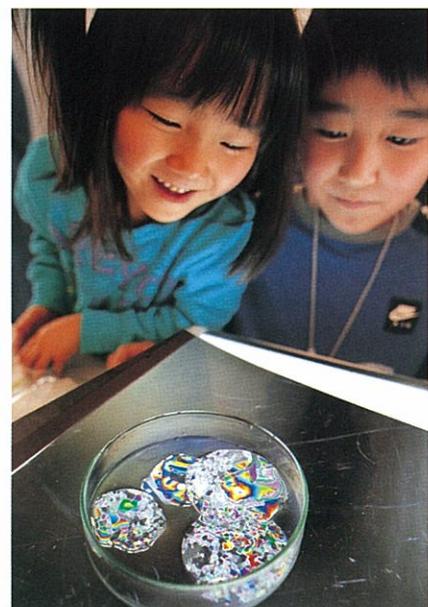
表萌子さん(東谷口小5年)と下家椋和くん(北潟小2年)が「子ども一日館長」となり、まつりをリードしてくれた。



12.12 立つ卵・押し込まれる卵



「く〜るクールくん」を作り、「氷のたけのこ」の実験



2010.2.13 氷のスタンドグラス  
(広報かが3月号の表紙になった写真)

## 子ども雪博士教室 報告（続）

### 2009.4.25 中谷宇吉郎と白山の雪（共催、テリーナホール）（→12頁）

<指導>納口恭明（防災科学技術研究所）、小川弘司（石川県）、神田健三（雪の科学館館長）

納口氏は「雪氷の面白さを伝える—Dr. ナダレンジャー—」として、発泡スチロールのブロックを高く積み上げて揺すって倒すなど、地震やなだれの科学を面白い実験で紹介した。小川氏は「白山の万年雪と雪形」、神田館長は「ふるさとの中谷宇吉郎」の題で講演した。（子ども7名 大人40名）

### 2009.5.30 一円玉を浮かそう（→5頁）

<指導>河田脩二（金沢大学名誉教授）

初めに水に浮かぶ物と沈む物を確認する。その後一円玉を浮かべ、どのように動くかを観察し、表面張力について学習した。最後に、沢山の一円玉を浮かせて模様を作って楽しんだ。（子ども12名 大人6名）

\*一円玉が水の上だとひつつくのが分かった。（小5）

### 2009.6.20 JAL 出前講座「そらいく」パイロットが見た地球の今（→4,12頁）

<指導>松田和也（JAL 機長）

開催中の写真展との関連で実施。地球の温暖化によると考えられる地球の変化や、JALグループが環境に対する負荷を小さくするために行っている様々な工夫や活動が紹介された。（子ども14名 大人36名）

\*枯れた木の方が水分が少なくよく燃えると思っていたが、生木の方が燃えるのは驚いた。（小6）

### 2009.7.18 柴山潟の生きものとビオトープ（→5頁）

<指導>松下奏（柴山潟の環境を守る会）、篠原隆一（湖北小学校校長）

湖北小のビオトープをまわり、そこに住む生物を観察した。次に、柴山潟の変遷や環境問題に関するスライドを見て、柴山潟の今後の課題について考えた。（天候が悪く、予定した屋形船乗船は中止）（子ども13名 大人13名）

\*柴山潟のゴミを減らさなきゃと思った。（小2）

\*ビオトープにいろんな生きものがいてびっくりした。（小5）

### 2006.9.12 氷の実験 <指導>神田健三

テキスト「水であそぼう」にもとづき、氷のペンダント、チンダル像、氷のレンズ、復氷、氷つりなどの実験と解説を行なった。（子ども8名 大人7名）

\*氷釣りで塩をかけると実際に温度が下がったのを確認できたのが良かった。（保護者）

### 2009.10.17 雲を作ろう

<指導>村井昭夫（北見工業大学大学院博士課程）

雲の種類と見分け方を学習し、花を活けるオアシスと長さの違う竹串で、どういう高さにどういう雲が発生するか考え、工作した。（子ども18名 大人9名）

\*雲の模型を作るのが楽しかった。（小5）

### 2009.11.14 JST 地域の科学舎推進事業「実験と模型作りから学ぶ雪と氷の科学」（→12頁）

<指導>山下晃・小西啓之（大阪教育大学）

水が蒸発して雲ができるまでを、ダイヤモンドダストや過冷却の実験を行うことで学習。次に、氷の結晶模型作りを行ない、水の分子が並んで雪の結晶の形ができることを学んだ。（子ども22名 大人15名）

\*氷以外の結晶の模型も作ってみたい！（小6）

### 2009.12.12 立つ卵・押し込まれる卵（→5頁）

<指導>神田健三

宇吉郎の随筆「立春の卵」にちなんで卵を立てる実験を行なう。次に、半熟卵を底から1センチ程熱湯の入った牛乳ビンの口に載せ、ビン水を水で冷やすと卵がビンに押し込まれていく実験をし、圧力について学習した。（子ども10名 大人8名）

\*水の圧力は上から来ると思ったけどいろんな方向から来ると分かりました。（小2）

### 2010.1.23 雪の実験と観察 <指導>神田健三

ペットボトルの中で人工雪を作る平松式の実験を行った。雪が成長する間、写真集『きらきら』に載った雪の結晶写真や歌を観賞し、結晶の見方などを学習した。その後、雲箱でダイヤモンドダストの実験を行った。（子ども25名 大人19名）

\*雪の結晶は低い温度の所で、水蒸気と核（ちり）でできることが分かりました。（小5）

### 2010.2.13 氷のスタンドグラス（→5頁）

<指導>竹井巖（北陸大学）

偏光板と光の関係をやさしく学び、セロテープや氷などを偏光板で挟んで観察するとスタンドグラスのように美しい色がつくことを体験した。その後、実際にプラスチック容器と偏光板で作った偏光装置を使って氷を観察した。（子ども12名 大人11名）

\*透明なものは偏光板で色づくことが分かりました。きれいでした。（小3）

## ラネージュ賞を新設、332点の応募、内54点が海外から

第5回雪のデザイン賞は、2008年12月1日から2009年4月30日までの期間に募集を行い、デジタル画像による一次審査(6月10日)と現物による最終審査(9月3日)を雪の科学館で行い、入賞・入選を決定しました。入選作品展は、雪の科学館で10月29日から2010年2月16日まで開催し、会期中7,819人の入館がありました。

今回、応募は、作品を撮ったデジタル写真をCDで提出する方式で行いました。今回は284の個人・団体から計332点の応募があり、このうち海外からの応募は54点で、これまでで最多となりました。海外からは、ラトビアの24点、韓国の21点が突出しており、ハンガリー、イタリア、アメリカ、ペルーからもありました。

今回、韓国の化粧品会社アモーレパシフィック社からの特別協賛でラネージュ賞(ラネージュはフランス語で「雪」の意)が新設されたことが大きな特徴でした。このため、韓国でも積極的に募集PRが行われました。館のホームページで、応募要項を日本語・英語の他、韓国語・フランス語で掲載し、国際的な広報に努めました。ラトビアでは前回同様、外務省のホームページなどで積極的にPRが行われました。

第5回の募集記念として、企画展「クリスマスの雪デザイン展」(2008.11.20～12.31)を開催し、募集の機運の盛り上がりにもつながりました。

回	開催年 (展示)	応募作品数 (内、海外から)
1	2000	303 (2)
2	2002	191 (0)
3	2004	372 (1)
4	2007	419 (24)
5	2009	332 (54)

表彰式は10月31日、映像ホールで開催され、全国から入賞・入選者15人、来賓・関係者らもあわせて約50人が出席しました。その直前(9月25日)の市長選挙で選出されたばかりの寺前秀一市長が挨拶し、県デザインセンター専務理事の棒田和夫氏が来賓祝辞を述べました。式には韓国のアモーレパシフィック社から4名が出席し、来賓紹介の際、日本支社(太平洋ジャパン)の代表取締役 李 錫宇(リ ソクウ)氏が挨拶しました。寺前市長から入賞・入選者に表彰状が授与され、ラネージュ賞は、市長からの他、李氏からアモーレパシフィック社の表彰状も贈られました。受賞者を代表して、金賞の江口功氏が挨拶し、審査委員の樋口敬二氏が講評をのべました。

その後、展示された作品を見ながら出品者による列品解説が行われ、樋口委員の他、審査アシスタントの古場田良郎氏、稲塚展子さんなどからコメントが添えられました。

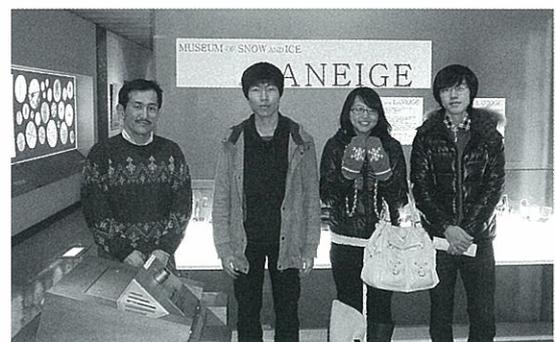
その後、参加者の交流会が喫茶・冬の華で行われました。



寺前市長から表彰される金賞の江口功氏

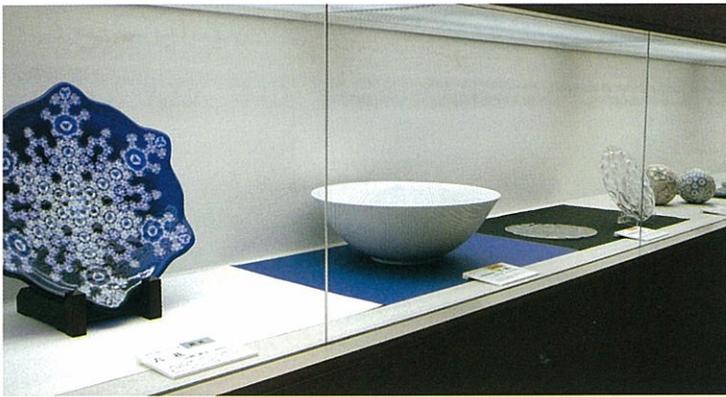


作品の前で入賞者による解説



作品展の間、雪デザイン(この場合は手袋)を身につけた来館者に写真を撮ってプレゼントしました。金沢大の坂本弘教授(左端)が韓国からの留学生と来館。教授は留学生を館に度々案内されています。





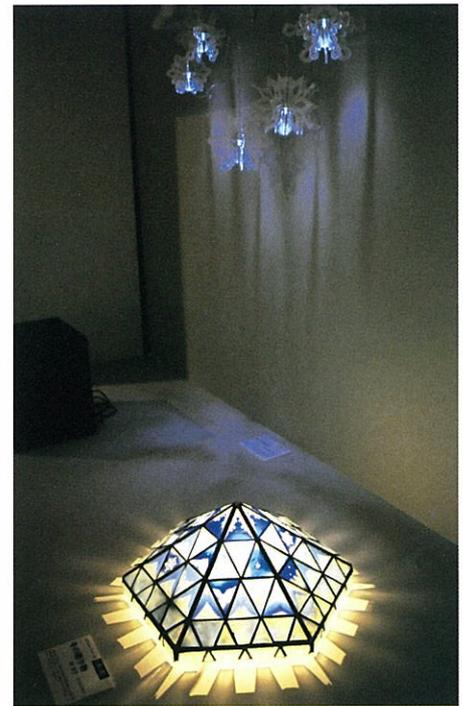
金銀銅賞などの作品



奨励賞などの作品



ラネージュ賞 (左) などの作品



あかりの作品

라네즈브랜드세계를만나는새로운곳, 일본 SNOW & ICE 뮤지엄 제5회 '눈디자인공모전' 라네즈상제정, 시상식열려



ラネージュのホームページに掲載されたデザイン賞の記事 (文章は省略)。韓国では色々なメディアで紹介された



表彰式参加者の交流会の  
後で  
(2009.10.31)

## 熊野古道なかへち美術館 特別展「雪・天から送られた手紙」について

熊野古道なかへち美術館 学芸員 山本 泰代

中谷宇吉郎雪の科学館と熊野古道なかへち美術館。加賀-熊野と遠く離れ、展示内容も全く違う2館ですが、「いつかぜひ一緒に展覧会を」、そんな話を神田館長としていたのは10年以上も前のことでした。具体的な案も出せないままに年月が過ぎて行く中、雪の科学館と神田館長周辺では新しいことが次々と始まり、宇吉郎という魅力ある科学者を軸にして広がる和は驚くほど大きくなり、充実した活動は全国へ、さらに海外へ、と伝わっていきました。

いつも雪の科学館の魅力とパワーに圧倒され、感嘆するばかりの私のところに、「雪のデザイン賞受賞作品を中辺路でも展示しませんか?」と神田館長から嬉しいご提案を頂いたのは2年程前。そして2009年の夏、念願が叶って「雪・天から送られた手紙」展開催の運びとなりました。

当館は、熊野三山（本宮大社、速玉大社、那智大社）への参詣道のひとつとして知られる中辺路ルートの中継点にある山奥の小さな美術館で、日ごろは地元ゆかりの二人の画家 野長瀬晩花（1889-1964）と渡瀬凌雲（1904-80）の作品を紹介しています。その一方で、草花をはじめ 森・川・海・水・光といった、熊野の環境に繋がる自然をテーマにした展覧会も開催してきました。そこでこの特別展では「雪」「氷」「雲」に注目することとし、さらに中谷宇吉郎についても学ぶ機会としてみました。

暑い季節に雪と氷の美を楽しむという、なんとも贅沢で涼しい夏休みの企画は、多くの方々に大変喜んでいただけたようです。来館者はデザイン賞の受賞作一点一点を楽しんで行かれ、雪と氷の美しさを再発見する機会となりました。中には、創造意欲をかきたてられ、次のデザイン賞に挑戦してみたいという方もいらっしゃいました。雪の科学館に行きたいからと、加賀市のことを聞かれた方、宇吉郎と同じテーマの研究をしているという方、子供たちは目をみはり、大人では、「孫にも見せたいので」と、繰り返し足を運んで下さった方もいました。NHK和歌山テレビがこの企画に関心を持って下さり、取材を受けました。

この展覧会でとても良かったことのひとつに、「雪」を介して人々の交流が盛んに行われたことがあげられるでしょう。展示室の作品や、繰り返しご覧頂いたダイヤモンドダストの実験を前に、観覧者同士が感想を述べ合う光景がずいぶんみられ、作品鑑賞はより充実

したものになったようです。また、ロビーでは雪の結晶の折り紙に熱中する人同士が教えあい、賑やかな空間になりました。

会期中に、「雪と氷」と「雲」の二つのワークショップを行い、これが展覧会のハイライトとなりました。雪と氷のワークショップ「ね、こんなこと知ってた!？」では、神田館長を講師にお迎えし、宇吉郎について楽しく学んだあと、実験で冷凍庫の中に浮かぶ雲からダイヤモンドダストを作ったり、氷の中に花が咲いたように見えるチンダル像を見るなど、雪と氷の不思議と魅力に触れることが出来、大人から子どもまで文字通り大喜びでした。実はワークショップ実施の2日間はまだ梅雨の真只中で、2日目には前代未聞の大雨が降るという大変な日でしたが、参加希望者は予定人数を大幅に超えてお断りせざるを得ないほどの盛況ぶりでした。

お楽しみ満載で新発見も多かった特別展を当地で開催できましたのも、神田健三館長はじめ雪の科学館関係者の皆様、中谷美二子様、作品ご所蔵の方々等の温かいご配慮があったことでした。改めて感謝申し上げます。また、技術とセンスの光った作品を制作された作家の皆様にもお礼を申し上げたく思います。

いつかまた、この先に繋がる新しい企画をぜひ一緒に!・・・職員もこぞって楽しく過ごさせて頂いたあの夏を思い出しながら、そんなことを念じているところです。

(→ 13頁に展示風景)



7月25・26日に行われたワークショップ

## 21年度の対外的な活動の記録

### ■ 講演・発表（神田）

- 2009.5.16 雪氷学会北信越支部大会（セミナーハウス あいりす）で発表「不思議で楽しい氷の実験プログラムと氷作り」
- 6.2 加賀市倫理法人会モーニングセミナー（APA ホテル加賀大聖寺駅前）で講演「中谷宇吉郎博士が残したもの」（20名）
- 7.25,26 熊野古道なかへち美術館で話と実験「ね、こんなこと知ってた!？」（各50名）
- 11.20 北海道仁木町、仁木みらい塾（仁木町町民会館）で講演「天から送られた手紙－雪のふしぎと中谷宇吉郎」（150名）
- 12.11 石川県博物館協議会実務担当者会議で「中谷宇吉郎雪の科学館の15年」（45名）
- 12.19 サイエンスカフェ2009 in グランドプラザ「雪」（富山大学理学部「科学コミュニケーション」）で「氷のふしぎ」（30名）



▲雪が吹き込む広場で氷の実験

- 2010.1.16 かほく市立図書館講演会（七塚生涯学習センター）で「天から送られた手紙 雪」（20名）  
くかもまる講座：市内の出前>
- 7.9 観光ボランティア大学講座（市民会館、7.19は館で）14名
- 10.22 三谷地区会館で三谷健康クラブ16名
- 11.7 大管波公民館20名

### ■ 実験教室・出前

- 2009.8.9 文化会館、加賀青年会議所子どもミュージカルで氷のペンダント（角谷・石川）
- 7.25 加賀市中央図書館で「夏にみる雪の結晶」実験教室22名（小橋）
- 10.3 雪氷楽会 in 札幌（円山動物園、日本雪氷学会主

催）で「氷であそぼう」のブース（神田・山崎敏晴・石川孝織）



▲雪氷楽会（右は釧路市博物館の石川学芸員）

- 10.24・25 加賀アート・フェスティバルで雪の折り紙（敦中・本田）
- 10.25 宇吉郎まつり（片山津温泉）で氷のペンダント（神田・石川・土岐）
- 11.5 山中中央保育園で雪の実験22名（小橋）
- 2010.2.5 山代幼稚園で雪の実験14名（小橋）

### ■ 執筆・監修

- 2009.6.30 雪氷北信越 第29号に巻頭言「美しくふしぎな雪氷の科学体験を」（1頁）
- 7.1 季刊【いとをかし】（両口屋是清）Vol.5, 氷特集に「氷の神秘－中谷宇吉郎が残したもの」（13頁）
- 9.30 石川県博物館協議会々報に「雪のデザイン賞の経験と第5回入選作品展」（4～5頁）
- 10.15 信州大学理学部同窓会報に「第5回小柴昌俊科学教育賞を受賞しました」（12～13頁）
- 11.9 北國新聞夕刊「舞台」に「雪のデザインを楽しむ」
- 11.15 雪氷（日本雪氷学会）Vol.71.No.6に「第5回雪のデザイン賞入選作品展」へのお誘い」（515頁）
- 12.31 北陸大学紀要33号に「石川県の氷室（雪室）の調査リスト」竹井巖・神田・小川（109～124頁）



▲橋立出水神社にある雪穴の跡。深さ約5m

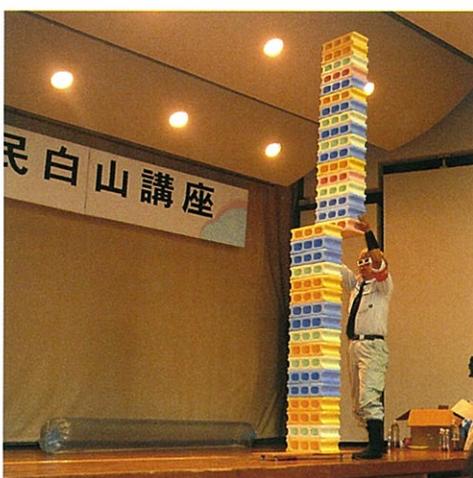
2010.1.15 雪氷 Vol.72, No.1 に新刊紹介『自然界の秘められたデザインー雪の結晶はなぜ六角形なのか?』(53 頁)

2.1 理科教室 (科学教育研究協議会) 2月号に〈行ってみよう 科学探検〉「中谷宇吉郎雪の科学館ー宇吉郎の科学者像に触れ、雪や氷のふしぎに迫る」(54 ~ 55 頁)

### ■ 共催・後援・協力

2009.5.16 雪氷学会北信越支部大会 (於 セミナーハウスあいりす) を共催 (発表 40 件 参加 65 名)

4.25 県民白山講座「中谷宇吉郎と白山の雪」(於 テリーナホール) を共催 (6 頁)



▲納口恭明氏による地震を理解する実験

5.24 「2009TOKYO 純水まつり」(上野公園) で「氷の科学館」設置に協力 (→ 1.13 頁)

6.20 JAL 出前講座「そらいく」を共催 (→ 6 頁)



▲講演する松田和也機長

7.1 ~ 9.6 熊野古道なかへち美術館の特別展「雪・天から送られた手紙」に協力 (→ 10.13 頁)

8.2 「第 40 回銀座プロムナード ゆかたで銀ぶら 2009 氷まつり」に氷のペンダント用モールドを貸出す

8.23 第 24 回利雪・遊雪・克雪フェア (小千谷市) にペンダント用水を提供

11.14 JST 地域の科学舎推進事業「実験と模型作りから学ぶ雪と氷の科学」を共催 (→ 6 頁)



▲水の分子模型をつないで結晶を作る

2010.1.8 ~ 2.7 島根県立図書館「雪に関する資料展」に協力

1.23 ~ 31 由吉・雪・ゆき展 (山田功主宰、ギャラリー rikka (名古屋)) に協力



▲ (下) 100 人が描いた雪結晶図の屏風

2.5 NHK 教育 TV 高校講座地学「冬から春の天気」の制作 (撮影は 2009.9.8) に協力 (2013 年まで同じ時期に放送される予定)

## 純氷まつりに「氷の科学館」

2010年は科学館を拡充し6月6日開催

—氷の川柳 4月15日から募集—



上野公園での「純氷まつり」に当館は「氷の科学館」の設置に協力し、5月24日、小雨の中1万3千人で賑わいました(→1頁)。今年は6月6

日(日)に開催され、新しく、氷をテーマにした川柳の募集もあります。詳しくは純氷まつりホームページをご覧ください。



「氷の科学館」スタッフ。神田館長(後左)、小野延雄氏(後左から4人目)と協力者たち。前右は2010年4月から雪の科学館で働くことになった福島郁子学芸員

## 平城遷都1300年祭で「献氷」

福住の氷室氷を荷車で運び(2010年7月24日)

奈良県天理市の福住町は日本書紀に出てくる都祁(つげ)の氷室があったところですが、地元福住の未来(ゆめ)クラブは1999年、古代にあったのと同様な氷室を作りました。毎年2月、氷室に氷を入れ、7月に氷室開き(氷まつり)をしており、雪の科学館とも交流があります。今年は平城遷都1300年の遷都祭の一環で、7月24日、古代衣装を着、福住から平城宮跡まで23kmの道のりを氷室の水を荷車で運んで献氷する行事が行われます。



2008年に奈良県知事に献氷したときの写真

## 熊野古道なかへち美術館での

「天から送られた手紙・雪」展 (2009.7.1～9.6 実施)



雪のデザイン賞(1～4回)の寄贈作品や宇吉郎、雪の資料が一堂に展示された。(→10頁)

# 追憶中谷先生

大東 三千代(\*)

## (1) 北海道大学常時低温研究室

昭和15年の夏、私は中谷先生がおられる北海道大学をお訪ねすることになった。当時私は宮城女学校の音楽専攻科の学生だったが、英文科の友人達も行きたいと言い、一緒に出かけた。札幌に着いた日、あいにく先生は会議のため上京中で、研究室の職員の方々のお迎えを頂いた。

プラタナスの街路樹の美しい札幌の市街に目を見張り、時計台、クラーク博士の銅像などを見学した後、常時低温研究室へと足を運んだ。大学構内にある小規模なその建物に入ると、防寒用のコート、帽子、手袋それにマスクを着用させられた。研究室のドアをあけると、恐らくマイナス15度以下だったのでしょう、5分間も我慢のできない寒さだった。10畳程の部屋には、天井から様々な電気コードが左右に引かれ、中心に人工雪製作装置がすえられていた。思わず、これで雪が？と、首をかじげたが、二重ガラスの円筒の装置の上部に兎の毛を一本つるし、下部の水を暖めると、水蒸気が上昇しながら冷え、毛の先に雪の結晶が出来るというのである。これで雪の結晶が生れるというのは、夢のようなことに思えて、私も学生は“なんとロマン

ティックなこと”と憧憬の念を持ったが、この寒さの中で先生や職員の方々は何年も研究を重ねてこられたのであり、それは、あく事のない探究心の賜物で、まさに神業だと痛感させられた。

## (2) 中谷家とのおつき合い

父・小宮豊隆は、東北大学にドイツ文学講座を設立するため仙台に来るよう阿部次郎から薦められ、ヨーロッパ留学の後、大正14年、東京・青山から杜の都・仙台に居を移した。父は漱石山房から離れることに躊躇があったようだが、仙台にはハイデルベルクのような森があるからと、気に入ったようだ。

昭和10年、寺田寅彦先生の臨終に立ち会った時、父と中谷先生と一緒に東北線の汽車で帰り、寺田先生の思い出を語り合っ、大変親しくなったようだ。それから、先生は札幌と東京を行き来する際には、しばしば仙台に立ち寄られ、家族とも親しく交流し、東北大学の教授らの書画の会にも参加されることがあった。

父は、女の子には情操教育をと、音楽が好きだった私のためにフランスでエラルのピアノを求めて日本に送ってくれたのだが、私は3人の兄達とスキー、スケート、魚釣りに出かけるというありさまだった。両親はこれを見て、女性らしい教養を身につけるべく、日頃家族ぐるみでお親しくしていた中谷夫人に委ねて、私は夏休みの約1ヶ月、札幌に留学することになったのである。

中谷夫人はまず、日常のプランをお作り下さり、京料理や金沢の治部煮など数々のお料理を教えて下さったが、客へのおもてなしの基本は、第一に、来客の前日に台所を磨き上げ、客用食器を全部並べて用意すること、お花は全てそこに咲いているように、自然の風景そのままに生けるようという松風流のお流儀で、自然美に対する造詣と心得が無いと中々難しいものであった。私はこのおもてなしの二つの基本を、今もって実践している。

そのほか、北大では、写真乾板の整理など、中谷先生のお手伝いをすることもできた。



仙台の小宮豊隆家に、宇吉郎が家族で訪ねたときの写真(昭和15年11月)。後列左から宇吉郎、小宮豊隆、(妻)恒、前列左から、筆者の(大東)三千代、敬宇、芙二子、咲子、(三千代の妹)末子。

宇吉郎の随筆「南画を描く話」の終わりに出てくる話で、宇吉郎が描いた絵に豊隆が「コスモスに句をいそがる、別れ哉」と賛を入れたのはこの時のことで、左にそのコスモスが写っている。

### (3) 札幌の中谷邸で

週末には、ご近所の北星学園の先生や生徒さん達が見えて、お互いのニュースを語り、音楽を楽しみ、夜更けまでリラックスした時間を過ごされた。その頃、京都から北大に臨時講義に見えられていた湯川秀樹博士が、風邪をひき、中谷邸で静養されていた。しかし、私はその事を全く知らず、ピアノでショパンやベートーベン等を弾き、後になって、さぞやおやかましい事だったでしょうと先生にお詫び申し上げたが、“家庭というものは、あああるべきものだ”と仰って下さり、大変恐縮し、反省したものだ。

中谷邸には、茅誠司先生、吉田洋一先生など北大の教授の方々、矢島祐利先生などがいらっしゃり、時折、お部屋に毛氈が敷かれて書画会が始まった。絵を描く方、書を揮毫される方、夫々気の向くままに筆をとられ、どなたかが絵を描かれると、お一人がその絵に相応しい賛をされ、その出来栄を褒めあい、一句一句にご意見が出て、楽しいさざめきに、時の過ぎるのも忘れてしまうような雰囲気であった。



同じ時の写真。左から、静子、敬宇、三千代、豊隆、芙二子、恒、咲子、末子

す。それには、中谷先生、静子夫人、そしてこの留学を実現させ、快く送り出してくれた私の両親に、今茲に改めて心から感謝の念を捧げます。当時人気だった唱歌のメロディーを想い浮かべつつ。

はまなすの 花紅き 北海の 磯にして  
時は夏 雲白く 想うこと はるかなり

### (4) 感謝の時

私にとりまして、「札幌留学」は一生の宝物でありま

(\*) おおつかみちよ 夏目漱石の研究で知られる小宮豊隆(東北大教授)の長女。東京都杉並区在住。

#### 編集後記 (ご挨拶を兼ね)

巻頭にも書きましたが、館の管理運営が4月から指定管理に移行します。それに伴い、市の囑託だった私は会社の囑託に変わって館長を続けることになり、職員のうち3名も館で働き続けます。新しい補充もあります。学芸員として東京から赴任する福島郁子さんは、米村でんじろうサイエンスプロダクションで働いた経験があり、4月の子ども雪博士教室で、さっそく講師を務めてもらいます。

学識経験者などの委員による館の運営委員会も、引き続き開催されます。

今号では昨年度の館の内外の活動を紹介しました

が、紹介できなかったことの一つは、私が日本物理学会から史資料委員の委嘱を受け、3回の会議に出席したことです。当館には、東大での宇吉郎の受講ノートのように物理学史上でも貴重な資料がありますが、会議に参加し、視野を広げることができました。

宇吉郎の没後50年が2年後になり、館としてどう迎えるかを考える時期に来ています。宇吉郎に関心を寄せられる方々からのご意見を歓迎します。

プラス・マイナスを議論する時期は過ぎ、指定管理下の館の活動が始まるにあたって、プラス面を積極的に生かし、意欲的な運営を作っていきたいと考えています。ご支援よろしくごお願い申し上げます。

(館長 神田 健三)

**お願い** 企画展「ふるさと発、中谷博士のもとへ」のために、小松中から北大物理へ進んだ関戸弥太郎、孫野長治、中谷迪、和泉莊一郎、藤岡敏夫、田中久一郎氏らの写真、資料、エピソードなどを集めています。何かご存知の方、館までご一報下さい。



▲夢幻の里-カタクリ (photo なおい)

なおい かずこ

札幌在住。文芸社ビジュアルアート出版文化賞2009 写真部門 個性派賞を受賞し、写真集『植物からの贈り物~The sense of wonder』(2010年)を出版。日本雪氷学会会員。

齋藤 義範

東京在住。高尾山で植物シモバシラにできる氷花を撮影。写真詩集『高尾山 氷花縁乱』(1995)がある。年々雪の科学館に作品アルバムを寄贈してその数17冊に。

▼シモバシラの根から吸い上げられた水が連続的に凍って氷花ができる (photo 齋藤)



▲冷えた朝、ルピナスの葉からしみ出た<sup>いびつ</sup>溢秘液が凍った (photo なおい)

# 植物から・水と氷の贈り物

## なおいかずこ・齋藤義範 写真展

### 2010年4月29日(祝)〜8月31日(火)

写真展をめぐる 談話会

4月29日(祝)

10時30分〜12時

雪の科学館

「自然との出会い」

なおい かずこ(写真家)

「シモバシラの不思議」 樋口 敬二(名古屋大学名誉教授)



高尾山-シモバシラの氷花 (photo 齋藤)



## 中谷宇吉郎 雪の科学館

NAKAYA UKICHIRO MUSEUM OF SNOW AND ICE

〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ-106

○開館時間:9:00~17:00(但し入館は16:30まで) ○休館日:水曜日(祝日は開館)

○入館料:一般500円、団体420円(団体は20名以上) 高齢者 250円(満75歳以上)

高校生以下及び障がい者等は無料

○アクセス(春まで)加賀温泉駅より10分、片山津バス停から徒歩5分、小松空港から15分